

World Watching 29

ワールド・ウォッチング

ロッテルダム旧港の再開発に見たもの



真田 仁

国土交通省港湾局
開発課課長補佐



ロッテルダム港と言えば、ユーロポートである。ヨーロッパ随一、世界でも有数のコンテナ港湾として揺るぎないプレゼンスがある。しかもマースク・シーランド社の国際コンテナ・ハンドリングの基地としても知られているところである。しかし、本稿で取り上げるのはこの有名なコンテナターミナルではなく、ロッテルダム旧港にある「Kop van Zuid (オランダ語の直訳で“南のコップ”)」と呼ばれる再開発地区である。ロッテルダムに行ってコンテナターミナルを視察して来なかった港湾関係者は珍しいであろう。ここでの視察を通して感じたことを紹介したい。



ロッテルダム港の再開発の変遷

ロッテルダム港はライン川の支流であるマース川河口部に位置するが、ユーロポートのある

河口地区からおよそ40km上流に11世紀頃から栄えたロッテルダムの旧港地域がある。

1960年代より始まった再開発は、造船所跡地を住居地域に変えていくことだった。1980年代まで続いたこの再開発手法は大きな問題に直面した。それは、住宅に特化したあまり、市街地との交通アクセス、種々の社会サービスがなごりにされたことだった。

そこで、1990年代になり過去の反省を踏まえ、業務、ショッピング、レクリエーション、そして「水際」の各空間をミックスさせた総合的な都市空間として再開発されるようになった。その代表例がロッテルダム市街の中心地の南、マース川南岸に位置する「Kop van Zuid」の再開発である。2010年を目標に、125haの地域に5,300人が居住し、400,000m²の業務施設、それぞれ30,000m²の教育施設とレクリエーション施設などが配置されることになる(写真1、写真2)。



写真1●ロッテルダム旧港地区



写真2●再開発地区全景(「Kop van Zuid」パンフレットより)

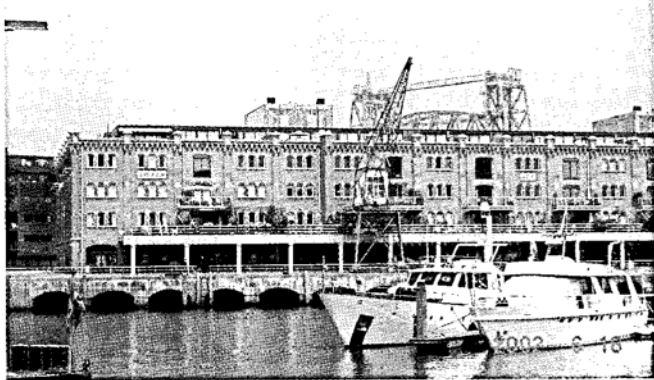


写真3●ユニークなウォーターフロントの建物



写真4●柵のない水辺のプロムナード



「Kop van Zuid」で見たもの

●クレーン付きマンション？

まずは、写真3を見ていただきたい。ここは、Entrepot地区にあるウォーターフロントの建物である。1階にはショッピングセンター、2階以上は住居となっている。もともとは雑貨を扱う港湾倉庫であったものを、再開発により商業施設を併設したアパートメントにリニューアルしている。ここで注目すべきことは、当時使用していたクレーンがそのままモニュメントとして保存され、アパートメントの壁面の飾りとして往時の港湾荷役の雰囲気醸し出していることである。おそらく日本ならば、邪魔者扱いされ早々に撤去されているだろうが、ここでは、邪魔者どころかベランダの一部として活用している。もしかしたら、引っ越しの際に重いピアノを出し入れするのにでも使っているのかもしれないが、住民のウォーターフロントへの理解度は我が国のそれとは大きく異なっているのではないかと感じさせる建物である。つまり、港湾とはどういう働きをしているのかを明確に意識した上で、ユニークなウォーターフロントを享受しているということではなかろうか。

同じオランダの水辺都市であるアムステルダムには古い街並みが残され、それをうまく活用しながら都市設計をしているのとは対照的に、ロッテルダムは、第2次世界大戦時ドイツ軍の爆撃により古い建物が徹底的に破壊されたため、比較的新しい街並みが形成されている。そんな歴史がロッテルダム市民の古いものへの愛着心となって現れているのかもしれない。

●海に落ちて大丈夫？

それから、これはオランダの水際線に共通することであるが、この地区の人々が憩う水辺のプロムナードには、野暮な転落防止柵なるものが一切設置されていないのである（写真4）。オランダでは、小さい子供にはまず泳ぎを教えるらしい。運河や海に万が一落ちて溺れないためだ。このような安全に対する考え方は水を完全にコントロールしているオランダならではのものと言える。



ロッテルダム旧港における再開発コンセプト

ロッテルダム港の再開発には次のような明確なコンセプトがある。

- ①着実な土地利用転換プロセス
- ②戦略的な計画（単なる青写真では終わらない）
- ③段階的な開発手法
- ④強制されない移転

このようなコンセプトを踏まえた再開発を実施する上で、計画・実施担当者が心がけているのが、「みなとと都市の協調」だという。換言すれば、「貨物と居住の共存」である。旧港がその物流拠点としての役割を次第に河口方の新港に譲るようになってきた現在においても、依然として「Fruit Port」と呼ばれ、果物と野菜のヨーロッパ各地への供給を担う埠頭が活動しているが、ロッテルダムが港湾で飯を食っていることを忘れないためにも、このような物流拠点と市民との距離が乖離しないように苦慮しているという案内のロッテルダム港職員の説明に大きな共感を覚えた。

どんなにきれいなウォーターフロントを整備したとしても、それは港湾の一部であり、物流機能あつてのロッテルダムだという固い信念のようなものが伺えた。「市民あつてのウォーターフロント、港湾あつてのロッテルダム」。説明者のこの言葉がこの港の再開発のコンセプトを一言で表現している。



最後に

現地視察する前にロッテルダム港湾当局をマース川沿いの立派な高層ビルに訪ねた。その際に印象に残ったことを2つ記しておく。

ひとつは、港湾のありとあらゆることを説明するプレゼンテーション・システムが完璧であったこと。

もうひとつは、本国では今まさにサッカー・ワールドカップの日本対トルコ戦が行われておりその状況が気が気ではない我々視察団に、逐次経過報告してくれた職員の親切さ（結果が違っていたらもっと感謝していただろうに…）である。